

「プラクティカルコロノスコーピー」第2版

岡本 平次 著

癌研究会附属病院院長

武 藤 徹一郎

大腸内視鏡検査(コロノスコーピー)が始められたころ、誰が現在の状況を予想したであろうか。コロノスコーピーによらず、数々のテクノロジーの進歩に伴う医療の変化には驚くばかりである。そして、1970年、ロンドンのセント・マーク病院でコロノスコーピーを行ったことを思い出している。その器械は70cm、アングルは2方向に120°くらいしか曲がらず吸引も内蔵していない代物で、最新のビデオスコープと比べたとしても内視鏡とは呼べない性能しかなかったが、注腸造影で見落とされたS状結腸癌を発見するくらいの働きはしたのである。その後、ずっとまじな機能を有する長いスコープを入手して、プッシュするだけの検査を行っていたが、帰国途中に、当時から既に高名な新谷博士の引き技と回転技に接し、目からウロコが落ちたことを鮮明に思い出す。

本書の著者、岡本平次博士はその新谷博士の元へ留学され、その技術の粋を学びかつ盗み取って、帰国以来、コロノスコーピー一筋に活躍を続けている、この道の超専門家であることはつとに知られている。当時、学会では1人法、新谷法の強力な推進者であるとともに、盲腸までの到達時間〇分〇秒、到達率〇%という記録を更新することでわれわれを常に驚かせていた。たしかに、コロノスコーピーは盲腸まで挿入できなけれ

ば話が始まらない。しかし、挿入することだけが目的ではなく、疾患と病変に応じて検査の目的が異なることが、コロノスコーピーの難しさであり面白さであろう。従来のコロノスコーピーの成書は、ややもすると技術あるいは疾患に偏重したものが多かったが、本書は実によく両者のバランスがとれていることが特徴である。

それにしても、見事な本ができたものである。岡本博士と言えば、電光石火のごとく速いコロノスコピストという印象ばかりが強かったが、これは大変な誤解で、コロノスコピー全般、ポリープの取り扱いの達人であり、あとがきでも述べられているように、その経験を通して世の中、社会の全体が見えてくる域に達した人である。著者はこれをコロノスコピーを通じての“内視鏡道”と提唱している。

本書の優れた特徴を挙げればきりが無いが、まとめてみれば以下のごとくである。

① すべて自らの経験に基づいて自らの言葉で述べられているので、わかりやすく説得力がある。

② カラー写真とそれを補う適切なシェーマが多種多様にわたっており、理解を助けている。特に合併症の写真は大変示唆に富んでいる。

③ 21章からなる本書の隅々にわたって、コロノスコピー、ポリペク

トミー、EMRにおける手技、患者、標本取り扱いに関する注意事項が詳細に、わかりやすく述べられている。

著者は“自然流コロノスコーピー”を勧めており、決して自己流を押し付けようとはしていない。Burning effectを考慮した摘除法(80%切除法)や、5mm以下のポリープの取り扱い方についても、拡大内視鏡などを持ち出さずに日常診療の中で常識的に対処する方策を述べている。内視鏡医自身のケア、インフォームドコンセント、無床診療所におけるコロノスコーピーについてまで述べられているのは、驚きと同時に著者のきめの細かい配慮に敬服の念を禁じえない。最後にあるQ&Aがまた適切で、多くの初心者が抱いているであろう疑問に見事に答えてくれている。初心者はまずここから読み始めるのがよいだろう。

本書はまさにプラクティカルコロノスコーピーの座右の書となる名著である。内視鏡道に達することなく引退してしまった筆者にも、“もう一度”という気を起こさせる気迫と内容に満ちた成書であり、すべてのコロノスコピストにお勧めしたい。

● B5 頁296 図80 写真22
カラー写真286 色図30 2001
定価(本体19,000円+税) 送料実
費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)